

平成の芥川賞・直木賞 Vol.3

“事件”になった文学賞

西村賢太、田中慎弥、又吉直樹……

報道記録 平成21年～31年

読売新聞社

読売新聞
アーカイブ選書

The Yomiuri Shimbun

読売新聞アーカイブ選書

平成の芥川賞・直木賞 Vol.3

『事件』になった文学賞
西村賢太、田中慎弥、又吉直樹……

報道記録 平成21年～31年

読売新聞社刊

はじめに

いつの時代も文学には、その時々々の社会の有りようが映り込んでしまうものだ。たとえば江戸が舞台の時代小説であっても、未来の宇宙で展開するSFであっても、そこで人間の営みが描かれるのであれば、物語を紡いだ、「今」を生きる作家の思考や感覚などが、何らかの形で反映される。

一方で読者も、自分たちが置かれた社会の有りようからは逃れられない。作品の読み方自体も影響を受けるだろうし、作品や著者に付随した様々な話題や「事件」によって本を手にすることもある。

本書に収録した平成21年から31年（140回〜160回）は、そんな「事件」が幾度も起きた期間だった、と言うことができそうだ。146回（平成24年1月選考会）の芥川賞は、円城塔さんが「道化師の蝶」で、田中慎弥さんが「共喰い」で受賞したが、選考会後の記者会見で田中さんが、選考委員の一人だった石原慎太郎・東京都知事を念頭に発した一言が、大きな話題となった。

「（自分が受賞を断り）気の小さい委員が倒れたりしたら、都政が混乱しますので。都知事閣下と東京都民各位のために、もらっというてやる」。

挑発的な発言が賛否両論を巻き起こしながらネットなどで拡散したこともあり、「共喰い」の刷り部数はあつという間に20万部に到達した。もちろん、小説は中身が評価されて売れるのが理想だ。ただ、こういった“事件”をきっかけに、多くの人が手に取ることも意味はある。後に田中さんもこう語っている。

「下世話な目、興味本位の目がある程度引き受けながらでない、作家の世界で生き残っていけない」

振り返れば、石原さんも34回（昭和31年1月選考会）の芥川賞を、選考会で賛否両論を受けた上で受賞し、「太陽族」という流行語を生んでいた。そんな“事件”の当事者だった石原さんがこの146回で選考委員を退任したのは、何とも不思議な巡り合わせだった。

153回（平成27年7月選考会）の芥川賞は、候補作の発表時点で大きな反響を呼んだ。人気お笑い芸人の又吉直樹さんが「火花」でノミネートされたからだ。 「火花」は選考会前ですでに40万部に達し、羽田圭介さんの「スクラップ・アンド・ビルド」と同時受賞が決まると勢いはさらに加速、一月後の贈呈式までに、芥川賞史上一位となる239万部の大ベストセラーとなった。

この“又吉事件”とも言うべき現象に焦ったのが、直木賞の選考委員たちだった。同回の直木賞は、東山彰良さんの「流」。珍しく、選考委員満票で授賞が決まったが、又吉人

気に埋もれてしまうことを恐れ、選考会後の記者会見では北方謙三委員が、あえて芥川賞に触れながら熱弁を振るう。

「芥川賞は話題の人が受賞したみたいだが、直木賞も捨てたものじゃない。それどころか、20年に一度の傑作。欠点のつけようのない青春小説だった」

そんな強いプッシュもあり、「流」も贈呈式までに24万部に達した。確かに「流」は、ここ20年の直木賞受賞作の中でも特筆すべき良作だった。

この2回以外も、話題には事欠かなかった。142回（平成22年1月選考会）では、白石一文さんが直木賞に決まり、初の親子受賞（父・一郎さんは97回で受賞）となった。144回（平成23年1月選考会）芥川賞の西村賢太さんは、「（選考結果の連絡を待ちながら）そろそろ風俗に行こうと思っていた。行かなくてよかった」と発言して一躍、時の人に。148回（平成25年1月選考会）芥川賞は、史上最高齢の75歳で黒田夏子さんが受賞し、さらに受賞作「a bさんご」がすべて横書きの作品だったことで、強い衝撃を与えていた。

「平成の芥川賞・直木賞」第3弾となる本書では、前2巻以上に多くの地方版記事を収めた。同じニュースの扱いが地域によってどう変わるのかも、楽しんでもらえることと思う。

読売新聞東京本社 編集委員 村田雅幸

目次

第140回——平成21年1月15日選考会 9

▽芥川賞 津村記久子「ポトスライムの舟」

▽直木賞 天童荒太「悼む人」／山本兼一「利休にたずねよ」

第141回——平成21年7月15日選考会 21

▽芥川賞 磯崎憲一郎「終の住処」

▽直木賞 北村薫「鷺と雪」

第142回——平成22年1月14日選考会 31

▽芥川賞 なし

▽直木賞 佐々木譲「廃墟に乞う」／白石一文「ほかならぬ人へ」

第143回——平成22年7月15日選考会 45

▽芥川賞 赤染晶子「乙女の密告」

▽直木賞 中島京子「小さいおうち」

第144回——平成23年1月17日選考会 53

▽芥川賞 朝吹真理子「きことわ」／西村賢太「苦役列車」

▽直木賞 木内昇「漂砂のうたう」／道尾秀介「月と蟹」

第145回——平成23年7月14日選考会 65

▽芥川賞 なし

▽直木賞 池井戸潤「下町ロケット」

第146回——平成24年1月17日選考会 77

▽芥川賞 円城塔えんじょうとう「道化師の蝶」ちょう／田中慎弥「共喰い」

▽直木賞 葉室麟「蝸ノ記」ひぐらし

第147回——平成24年7月17日選考会 113

▽芥川賞 鹿島田真希「冥土めぐり」めいど

▽直木賞 辻村深月「鍵のない夢を見る」

第148回——平成25年1月16日選考会 123

▽芥川賞 黒田夏子「a b さんご」

▽直木賞 朝井リョウ「何者」／安部龍太郎「等伯」

第149回——平成25年7月17日選考会 137

▽芥川賞 藤野可織「爪と目」

▽直木賞 桜木紫乃しの「ホテルローヤル」

第150回——平成26年1月16日選考会 161

▽芥川賞 小山田浩子「穴」

▽直木賞 朝井まかて「恋歌」れんか／姫野カオルコ「昭和の犬」

第151回——平成26年7月17日選考会

181

▽芥川賞 柴崎友香「春の庭」

▽直木賞 黒川博行「破門」

第152回——平成27年1月15日選考会

189

▽芥川賞 小野正嗣「九年前の祈り」

▽直木賞 西加奈子「サラバ！」

第153回——平成27年7月16日選考会

203

▽芥川賞 羽田圭介「スクラップ・アンド・ビルド」／又吉直樹「火花」

▽直木賞 東山彰良「流」

第154回——平成28年1月19日選考会

219

▽芥川賞 滝口悠生「死んでいない者」／本谷有希子「異類婚姻譚」

▽直木賞 青山文平「つまをめとらば」

第155回——平成28年7月19日選考会

233

▽芥川賞 村田沙耶香「コンビニ人間」

▽直木賞 萩原浩「海の見える理髪店」

第156回——平成29年1月19日選考会

245

▽芥川賞 山下澄人「しんせかい」

▽直木賞 恩田陸「蜜蜂と遠雷」

第157回——平成29年7月19日選考会 261

▽芥川賞 沼田真佑「影裏」

▽直木賞 佐藤正午「月の満ち欠け」

第158回——平成30年1月16日選考会 279

▽芥川賞 石井遊佳「百年泥」／若竹千佐子「おらおらでひとりいぐも」

▽直木賞 門井慶喜「銀河鉄道の父」

第159回——平成30年7月18日選考会 303

▽芥川賞 高橋弘希「送り火」

▽直木賞 島本理生「ファーストラヴ」

第160回——平成31年1月16日選考会 323

▽芥川賞 上田岳弘「ニムロッド」／町屋良平「1 R ラウンド 1分34秒」

▽直木賞 真藤順丈「宝島」

◎この電子書籍は、平成21年（2009年）～平成31年（2019年）にかけて、読売新聞に掲載された芥川賞・直木賞の関連記事を一冊にまとめたものです。掲載日は各記事に記載しています。肩書、年齢、その他の情報は、掲載当時のままです。

第140回——平成21年1月15日選考会

▽芥川賞受賞作

津村記久子 「ポトスライムの舟」〔群像〕11月号

▽直木賞受賞作

天童荒太 「悼む人」〔文芸春秋刊〕

山本兼一 「利休にたずねよ」〔PHP研究所刊〕



◆芥川賞・直木賞候補作

第140回芥川賞・直木賞
(日本文学振興会主催)の候補
作が発表された。

芥川賞は鹿島田真希「女の庭」
(文芸秋号)、墨谷渉「潰玉(か
いぎよく)」(文学界12月号)、田
中慎弥「神様のいない日本シリ
ーズ」(同10月号)、津村記久子
「ポトスライムの舟」(群像11月
号)、山崎ナオコ「手」(文学
界12月号)、吉原清隆「不正な処
理」(すばる12月号)の6作。

直木賞は恩田陸「きのこの世
界」(講談社)、北重人「汐(しお)
のなごり」(徳間書店)、天童荒
太「悼む人」(文芸春秋)、葉室麟
(りん)「いのちなりけり」(同)、
道尾秀介「カラスの親指」(講談
社)、山本兼一「利休にたずねよ」
(PHP研究所)の6作。

選考会は15日午後5時から、
東京・築地の新喜楽で行われる。



村山・置賜

山形支局
〒990-0025
山形市あこや町
3-15-27
電話 023-624-2121
Fax 624-0730
メールはyamagata@yomiuri.comへ

米沢支局
電話 0238-23-3313
長井連絡所
電話 0238-88-3335
通信部
酒田0234-22-0687
鶴岡0235-22-0465
新庄0233-22-3528

北重人さん「汐のなごり」

出身 直木賞候補作に

15日選考会

酒田出身

酒田市出身の作家・北重人さん(61)の「汐のなごり」が第140回直木賞の候補作の一つになった。県内出身者はこれまで井上ひさしさん(74)など3人が受賞しており、北さんが選ばれば4人目の快挙となる。全6作品の候補の中から、15日に東京都内で開かれる選考会で受賞作品を決める。



北さんは千葉大学工学部を卒業し、一級建築士として都市計画や景観計画などに携わり、1999年に「超高層に懸かる月と、骨と」でオール読物推理小説新人賞を受賞、作家デビューした。

「汐のなごり」は、昨年9月に刊行された短編集で、六つの物語から構成。北さんはこれまで「夏の椿」、「蒼火」などで江戸を描いたが、「汐のなごり」では北前船で栄える頃の地元・酒田を舞台にした。

34年間ひとりの男を思い続ける元遊女、飢饉からの逃避行の中で生き別れた兄弟、子や孫の男児が早死にしてしまう商家の女将……。いずれの物語にも、過去の思いを胸に秘めながら暮らす市井の人々が情緒あふれる筆致で描かれている。

芥川賞 津村記久子さん

直木賞 天童荒太さん 山本兼一さん



携帯電話で知人に受賞の喜びを伝える津村さん(文京区の講談社)。(待田晋哉撮影)

第140回芥川賞・直木賞(日本文学振興会主催)の選考会が15日夜、東京・築地の新喜楽で開かれ、芥川賞に津村記久子さん(30)の「ポストスライムの舟」(群像十一月号)、直木賞に天童荒太さん(48)の「顔」2面にIIの「悼む人」(文芸春秋)と山本兼一さん(52)の「利休にたずねよ」(PHP研究所)の2作が決まった。副賞は各100万円。

契約社員の女性にエール 津村さん

「あっけにとられている」。東京・音羽の講談社で芥川賞決定の連絡を受けた津村記久さんは、母親に「入賞したよ」と携帯メールで連絡。「おめでとう」と返信がかえり、編集者らと喜びをわちあった。

大阪生まれ。9歳で両親が離婚した。早く自立したかったのに、大卒時は就職水河期。「最初の会社で上司にいじめられ、9か月でやめた経験は、今も夢にうなされる」という。5年前、一緒に暮らしていた祖母の死去をきっかけに本格的に小説を書き始め、現在は日中、土木関係の会社で働き、一眠りした後、深夜2時から4時まで執筆。朝は7時55分に起き、栄養ドリンクを一本飲み、電車通勤する。

自身と同世代の契約社員を主人公にした受賞作では、「大きい望みがなくても、楽しい生活があると書きたかった」。眼鏡越しに、表情を和らげた。



記者会見で受賞の喜びを語る山本兼一さん

津村さんは2005年にデビュー。昨年末、野間文芸新人賞を受賞。芥川賞は、連続して3回目の候補で栄冠を射止めた。受賞作は、契約社員として働く工場の低賃金を補うための仕事を掛けもちする30歳前の独身女性が主人公。芥川賞選考委員の宮本輝さんは「つつましやかに生活している女性たちの日々がてらいのない文章で描か

れている」と評価した。天童さんは96年、「家族狩り」で山本周五郎賞。2

000年「永遠の仔」で日本推理作家協会賞。受賞作では、人の死に軽重を付ける現代社会に一石を投じた。山本兼一さんは京都市生まれ。出版社勤務などを経て2004年、「火天の城」で松本清張賞。受賞作は、千利休がなぜ茶道を大成し、秀吉に弁明せず死を受け入れたか、秘められた恋した。

に触れつつ描いた歴史小説。3回目の候補で直木賞を手にした山本さんは「1回目が一番ドキドキして、2回目は正直がっかり。思い入れの深いこの作品で取れて、よそぞ、という思い」と満面の笑みを浮かべた。直木賞選考委員の井上ひさしさんは「天童作品は、人間にとって一番大事な生と死と愛の三つに取り組み力作感がある。山本作品は、日本の文化を根底からデザインした利休の秘密を、上から下から照明を当て、えぐりだした」と評価した。

第140回直木賞に選ばれた

てんどう あら た
天童 荒太さん 48

顔

「天童荒太は次の本
がいつになるか分から
ないと、選考委員の方
々が気を使ってくれた
のでしょうか」。記者会見の冒
頭、会場をどっと沸かせた。

ミリオンセラー「永遠の仔」

から10年。本作の執筆に7年も
かかったのは、「こんな人物を、
現実を生きる読者に必要だと思
ってもらえるか、問い続けてき
たから」。

主人公は、全国の事故や事件
の現場を訪ね、そこで死んだ見

ず知らずの人を悼む青年。込め
た思いは切実だ。「人の死に軽
重をつければ、生きる人の命に
軽重をつけることにもなる。誰
の死も等しく扱う存在がいたら
どうだろうか」

松山市に生まれ、大学では演
劇学を学び、卒業後は映画脚本
も手がけたが、「感情をより豊
かに表現できる」と小説を選ん
だ。勇気をくれたのは、児童虐
待を扱った「永遠の仔」に共鳴し
た読者から、5000を超え
る手紙が届いたこと。自分の本を、
大切な存在として心の中に置い
てくれる人の多さに驚いた。

「以来、読者が何を欲してい
るのか、その答えを探して書い
ている。だから、この受賞は、
あなた方のおかげです」

(文化部 村田雅幸)



撮影・竹田津敦史

直木賞

「後輩として誇り」

松山北高 天童さん母校祝賀ムード

県立松山北高出身の作家、天童荒太さん(48)が小説「悼む人」で直木賞を受賞して一夜明けた16日、松山市文京町の同校は祝福ムードに包まれ、生徒らは惜しみない賛辞を贈った。

同校では朝から各教室の黒板に受賞を伝える新聞記事が掲示され、休み時間に多くの生徒が取り囲んだ。同校の図書館には担当教諭から受賞作が寄贈され、さっそく手に取って読む生徒や、「永遠の仔」などの代

表作を借りに来る生徒の姿が見られたという。

天童さんが在学時に所属していた演劇部の副部長で1年の和泉尚邦さん(15)は「こんなすごい人が北高にいたなんて。後輩として誇りに思う」と話し、生徒会長(17)の2年副島丈義さんは「スポーツで有名な学校だったが、これからは文学の面でも素晴らしい伝統を築いていきたい」と目を輝かせた。

芥川賞「ぎりぎり小説」出現 直木賞 3作で決選投票

「ボトスライムの舟」で芥川賞に決まった津村記久子さんは、先月野間文芸新人賞を受けたばかり。3期連続の候補で栄冠をもう一つ射止め、作家としての充実を感じさせた。

選考委員の宮本輝さんによると、契約社員の日常など、懸命に生きる等身大の女性たちを描いた津村作品については、「てらいのない文章で書かれたつつましいやかな生活は、どんな時代にも普遍的なもの。作家はドラマを作ろうとし、そこ

が傷になることも多いが、それを書かなかつたのは大きな成長」と評価した。また「何の姿勢もない観

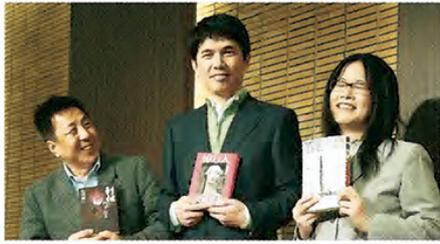
薬植物の葉の舟は、荒波にもまれる今のよるべない日本のメタファー」と指摘。津村さん自身は「書いたのは昨年7月から9月。不況が来るとは思っていなかった」というが、雇用情勢が悪化する現在の社会を問わずも先取りする形となっ

た。候補作全体としては、これまででこそこの学歴、そこそこの結婚を描いた『そこそこ小説』が多かったが、今回からはっきりと、契約社員や派遣などぎりぎりの生活をしている人たちの登場させて何か新しいものを提示する傾向が出てきた」という高樹のぶ子委員の発言を紹介した。

最後まで受賞を争った田中慎弥さん「神様のいない日本シリーズ」については「豚殺し、野球、ベケットなどの道具立てでドラマ仕立ての挑戦をしたが、まともを保持せず、玉砕した」と評した。

天童荒太さん『悼む人』と山本兼一さん『利休にたずねよ』の2作に決まった直木賞は、最初の投票で上位になった山本・天童作品と道尾秀介さん『カラスの親指』の3作で決選投票。その結果、「文学は何がで

きるか、作者が求道者のようにぶつかった」姿勢が評価され天童さんの受賞がまず決定。その後、最初の投票では最多得票だった山本さんとダブル受賞を認めるかを巡って議論になった。そこで「大問題を扱った」天童さんだけがと芥川賞のようになってしまう。娯楽小説の王道を行く山本さんと両方あるほうが、直木賞の幅が広がる」との意見が出て異例の3度目の投票を行い、2作受賞が決まった。道尾作品は「仕掛けも鮮やかで罪の償いというテーマも成功している」と評価されたが、及ばなかった。



芥川賞に選ばれた津村記久子さん(右)と、直木賞に選ばれた天童荒太さん(中央)、山本兼一さん

第140回芥川賞・直木賞の候補に挙がった九州・山口在住2作家の受賞はならなかった。芥川賞候補の田中慎弥さん(36)(山口県下関市)、直木賞候補の葉室麟さん(57)(福岡県久留米市)だが、ともに今後につながる充実ぶりを示す機会となった。

(矢田民也、右田和孝)



田中慎弥さん



葉室麟さん

田中さんは高校卒業後、一度も職に就かず、母親と2人で暮らしながら一日も欠かさず、「生きるために小説を書いてきた」という。「八引きこもり」V時代のメソッドを言葉へと結晶化させた。昨年田中さんが三島由紀夫賞を受けた際、選考委員の平野啓一郎

芥川賞候補 田中慎弥さん

氏がそう評したのも、こうした異色の経歴ゆえだった。

田中さんが芥川賞の選考会前日に記者会見し、語った言葉も印象的だった。「父親とか、神とか、絶対的なものは、いないから『いる』と感じる」「奇跡はやってこないことではか実感できない」

徹底して逆説的にとらえ

徹底して逆説的に

50代の力強い歩み

に、父親が扉越しに語りかける独白体小説は、これまでにない、なじみやすい物語で新境地を開いたとも言えそうな作品だ。

昨年は川端康成賞も受賞し、その異能は一気に開花した感さえある。「小説は自分と世の間にある衝立みたいなもの。(コミュニケーションをとる)窓口でなく、隔てるもの」。こ

く、50歳の時勤めをやめ、同時に、歴史・時代小説に転じた。「フィクションでなら、歴史を個人のものとして取り戻せますからね」その後は2004年、「乾山晩愁」で歴史文学賞、07年に「銀漢の賦」で松本清張賞を相次いで受賞。同郷の清張の本格的な活躍が50歳からだったことにも励まされたという。

今回は、佐賀藩の支藩、小城鍋島藩士のいちずな忍ぶ恋を描きつつ、忠義とは何かを問うた「いのちなりけり」が初の直木賞候補に。

「確かな筆だが、いろんな話が入りすぎて損をした」(井上ひさし選考委員)と評され、受賞は逸したが、この作家の50代が力強い歩みであることに変わりはない。

福岡・秋月藩を舞台にした新作も刊行間近。「九州で暮らしているの、その土地の風土を反映した、土地の人にしか出せないものを大事にしていきたい」と意欲を見せている。

ようと見る見方は、これまでの作品、3度目の候補作だった今回の「神様のいな日本シリーズ」にも貫かれ、作品の魅力ともなっているからだ。

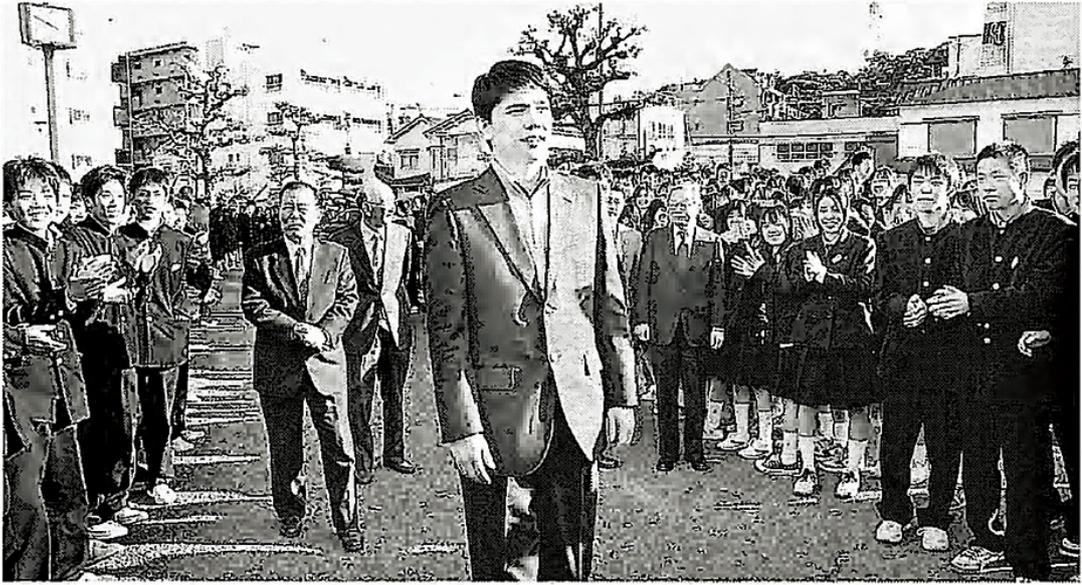
宮本輝選考委員は「ドラマチックな仕立てにした意欲は買うが、まとまりを欠いた」と講評。だが、野球チームでいじめられて部屋にこもった小学生の息子

一方、葉室さんは、いわば遅咲きの作家である。

北九州市生まれで、西南学院大卒。新聞記者を経て41歳から小説を書き始めた。純文学をフィールドにしたが文学賞とは縁がな

直木賞候補 葉室麟さん

直木賞・天童さん ようこそ母校へ



卒業以来初めて訪れた母校で、後輩たちから拍手で歓迎される天童さん（松山市の松山北高校で）

松山北高 「誠実な仕事する人に」

小説「悼む人」で直木賞を受賞した松山市出身の作家、天童荒太さん(48)が16日、母校の県立松山北高校（松山市文京町）を訪れた。

卒業後初めて母校に足を踏み入れたという天童さんは、後輩たちに「誠実な仕事をする人になってください」などと呼びかけ、歓声

に手を振って応えていた。

受賞報告のために同校を訪れた天童さんは、中庭で生徒約800人に迎えられた。玄関前で2年の渡部弥生さん(16)から花束を受け取った後、校長室で放送部のインタビュアーに答え、「高校時代の友人との出会いは、私にとってもとても大きなことだった」などと語った。

2年の金子貴文さん(17)は「天童さんはオーラが違った。自分も活字の世界で、日本を飛び出して活躍したい」と目を輝かせた。

直木賞受賞 山本兼一さんに聞く

「利休にたずねよ」（P
HP研究所）で第140回
直木賞の受賞が決まった作
家の山本兼一さん（52）が時
代小説を書き始めたのは、
司馬遼太郎作品を読みふけ
ったことがきっかけだっ
た。今年12日で没後13年を
迎えてもなお、読者を魅了
し続ける司馬作品。山本さ
んはそこから何を見いだ
し、どのように「進化」さ
せたのか。（浪川知子）

「龍馬がゆく」「国盗り物語」
「坂の上の雲」「鞍馬疾風録」
……。山本さんが司馬作品を乱読し
たのは、20代後半から30代にかけ
て。同志社大を卒業後、東京で業

作家への道 司馬作品に触発



司馬遼太郎

界紙記者やフリーライターとして
活動していたころだ。
「10代の頃好きだったのは、島
尾敏雄や小川国夫といった純文
学。人間の弱さを見つめる内向の
世代の文学に共感を覚えました。」

「日本の深層への旅」 時代小説の醍醐味

ところが司馬作品を知って、こん
な力強い小説もあるのかと夢中に
なったのです」

36歳で京都へ帰郷し、執筆に取
り組んだ時、頭に浮かんだのは読
み慣れた時代小説だった。しかし、
司馬作品は時代小説を書こうとす
るものにとって、「その影響を受
ければ垂流にしかなれない危険な
存在」でもあった。

「同じ題材を取り上げる場合で
も、司馬さんとは違う角度を探し
出さなければ、新しい歴史文学に
はなりません。幸いにも、司馬さ
んが書かれた時代から数十年の時
がたち、その間、歴史研究は大き
く進んだ。それらの新しい知見を

1966年に刊行された「国盗り
物語」にも姿を見せるが、安土城
については単に「南蛮風を加味し
た日本最大の巨城を築きつつあっ
た」と書かれるにとどまった。安
土城そのものが本能寺の変の直後
に焼失したため、当時はどんな城
だったのかが分からなかったの
だ。

「近年、発掘調査が進み、研究
者の間から安土城のさまざまな復
元案が出されるようになりまし
た。特に天守の内部に吹き抜けの
空間があったかどうかを巡る論争
には、小説の構想上、大いに触発
されたものです」

読者が小説に求めるものも、時
代によって異なる。

「司馬作品を賞く
大きなテーマは入男
の野心。司馬さん
が主にお書きになっ
た高度経済成長期に
は特に求められ、今
も読者を魅了し続け
るテーマです。僕の
場合は、他者のために自らを犠牲
にできるかどうかという入志を
問いたい。無意識のうち今の時
代に欠落しているものを、歴史に
投影しているのかもしれない」

背景にして、今だから書ける時代
小説が可能になったのです」
例えば織田信長の下で安土城を
築いた棟梁、岡部又右衛門を描
き、2004年の松本清張賞を受
けた「火天の城」。この人物は、

時代の変革者を取り上げること
が多かった司馬作品に対し、山本
さんが「利休にたずねよ」で追求
したのは、茶の湯を大成した千利
休の美意識の根源だった。日本人
の特徴を「繊細さ」ととらえる山
本さんの特徴が表れている。

「日本の深層への旅」。時代小
説を書く醍醐味を、山本さんはこ
う表現する。知らなかった日本を
発見するために、時代小説は何よ
りの手がかりとなりそうだ。



山本兼一さんは、時代小説を通して「日本の深層への旅」を続けた。という一冊が世に登場



芥川賞・直木賞贈呈式

第140回芥川賞・直木賞の贈呈式が2月20日、東京・丸の内のレストランで行われた。

様々な仕事を掛け持ちする契約社員の独身女性が主人公の「ポストスライムの舟」(「群像」11月号)で芥川賞を受賞した津村記久子さん(31)は、「自分がいたで賞と書いていなかったたので、まだ驚いたまま」とあいさつ。受賞決定後、取材や原稿依頼に追われる中で、自分を見失いそうになるときもあったと言いが、「書いてる間だけは『これは自分がやること』という実感があつた」と話し、「その実感はすごく幸福な感覚。今までよりさらに小説を書くうと思つた」と語つた。

芥川賞の高樹のぶ子選考委員は、



右から芥川賞の津村記久子さん、直木賞の天童荒太さん、山本兼一さん。増田教三撮影

津村記久子さん

「自分が書く…幸せな感覚」

天童荒太さん

「痛み抱えつつ尽くす人多い」

山本兼一さん

「利休の茶 本質は恋にあり」

「受賞作は、小さな夢をつなぐしかない今の時代をよく表している。主人公の女性の姿は、社会の現実を受け止めながらいじけず生きていく現代の人間像」と高く評価した。

一方、ダブル受賞となった直木賞では、『悼む人』(文芸春秋)で受賞した天童荒太さん(48)が、「多くの方に支えられ、書き上げた作品。読者からの声で、痛みや虚無感を抱えながら人に尽くそうとしている人が多いことも知った。今、この受賞の席にいられることはさらに大きな幸せ」と、喜びを語つた。また、『利休にたずねよ』(PHP研究所)で受賞した山本兼一さん(52)は、「利休は日本史の中の美の巨人で、わびさびの世界といわれる彼の茶の本質は、恋の力にあると考えるこの物語を書いた。取材で日本の深層に旅することはわくわくする体験。読者のエネルギーになるよう歴史の中のエッセンスをくみ上げたい」と決意を語つた。今回から直木賞の選考に加わつた宮部みゆき委員は、「方向性は違つたようだが天童さん、山本さんの2作は、人が死とどう向き合つかを考えさせ、21世紀の日本人の死生観を問い直す共通のテーマをはらんでいる」と評価。また初めての選考の感想を、「一服したばかりの侍のように心細かったが、この2作の旗印が頼もしい援軍だった」と振り返つた。

**立ち読み版はここまでです。
この続きは製品版でお楽しみください。**